

## 乳腺化生癌の一例

峰 高義 (社会保険紀南総合病院), 石水 弘子, 角田 耕造, 柴田 耕三,  
榎本 純爾, 片井 敦雄, 宮本 一雄 (社会保険紀南総合病院 中央臨床検査部)  
山邊 和生 (社会保険紀南総合病院 外科)

### 乳腺化生癌の一例

(はじめに) 乳腺の化生癌は乳癌取り扱い規約の特殊型に分類される腫瘍である。その発生頻度は乳癌全体の約0.1%程度と、極めて稀な組織型である。今回我々は多彩な形態を示す化生癌の一例を経験したので報告する。(症例) 52歳女性。既往歴、家族歴に特記すべき事なし。現病歴は最近、左乳房に痛みがあり、しこりに気付き来院。エコー所見では左乳房C領域に10.4×11.0×13.7mm大の低エコーで、境界明瞭な円形の腫瘤を認め、穿刺吸引細胞診を施行した。(穿刺吸引細胞所見) 核の腫大、大小不同の著明な細胞が、集塊状から孤立散在性に多数認められた。集塊状の細胞では、異型の強い乳頭腺管癌を考えたが、孤立性に見られる巨細胞や多核細胞は肉腫様だった。しかし通常の肉腫細胞に比べ胞体に厚みがあり、ライトグリーンに濃染していた。核クロマチンは顆粒状に増量し、肉腫細胞よりも癌細胞の化生変化を思わせる細胞だった。以上より化生癌を強く疑い、乳房全摘術が施行された。(組織所見) 摘出腫瘍は11×12×13mm大で、肉眼的に結節状の境界

明瞭な腫瘍だった。組織学的に腫瘍を構成する細胞には、上皮様細胞と非上皮様細胞が見られた。上皮様細胞には乳頭状の増殖が見られ、非上皮様細胞では巨核、多核の異型細胞が主体で、MFH様の像であった。両者の間に移行像が見られることから、化生癌と診断された。免疫組織学的には、ビメンチン、S-100蛋白が全体に陽性、ケラチン、EMAは一部で陽性を示した。(まとめ) 本症例のように細胞診で異型性が明らかで悪性との判定が容易であるにもかかわらず、組織型の推定に苦慮するような場合は、乳癌の特殊型の可能性も考慮する必要があると考えられた。化生癌は、化学療法や放射線療法にも抵抗性で、予後不良であるとされているが、腫瘍の大きさが予後に関係していると言われていることから、早期発見が大切で、細胞診による確定診断は重要と思われた。

連絡先 0739-22-5000 (内線 319)